源氏五十四帖

小倉百人一首

全

小倉百人一首

春川画

蓬萊文庫

叙

歌は人の心を動かす種となり、人の口ずさむ詞となりて、遠き昔より、男女老幼の区別なく、やまと歌の真髄を悟り、詞に実を伴はせ、心と知恵とを発揮し、三神の恵みを受け、鶯も鳴くして色香の美しきを愛し、蛙も鳴くして色香の美しきを愛し、彼の小倉の山荘より選まれし百首こそ、詞の花にして、かぐわしく、香ゆかしく、こころ豊かなる花ぞかし。

蓬萊文庫

ふゝぎをへるい屋もむかしかぎりなり明ど。獨ごと
せゝ打ゝ。書屋のもゝ〳〵ぐ居蔵のこのをりよそぐ光きそ。
花ゐるの京ゝ明まゝ新宮さゝ眼実百首の出をれ出し
く登はすゞ名よ庫せよをこふと演のまゝ月の数あゝ奴
ど。のなぐもよ義ぐかゝく。自ら雲みを視の梅よ重
な果ゝ。そぐまゝ残まる て庫ゝなをゝ志の程。

西山宗因

梅の家のゑゝ西

空蟬

夕顔

柿本人麿

山部赤人

若菜

素摘花

中納言家持

紅葉賀

花宴

安倍の仲麿

唐の原にいでてみる
月かもこれは
かすがなる
三笠の山にいでしつき
かも

葵

榊

法師

我いほの松の
ねにかかる
雪をはらへば
ちりかかる
人はいとはぬ
身をぞ

小野小町

花の色は
うつりにけ
りいたづらに
我身よにふる
ながめせしまに

蟬丸

これやこの行くも
帰るも別れては
しらぬあふ坂の
関

参議篁
和田乃原
八十潟
漕ぎ出でぬと
人には告げよ
海人の釣舟
僧正遍昭
天の風
雲の
かよひぢを
吹きとぢよ
乙女の姿
しばしとどめん
荒散里
たちぬるの
袖ぬれぬ
わたつみ
ざまを
見ぬ
里を
きりぬてぞ
やまぶき
須磨
うきめかる
いせをあの
あまの
ひとりぬれ
もしほたれ
つつ
浦の
明石
秋の夜の
つきぬ
あかしの
雲井に成
時のまも
みん
澪標
かげ
なにはの
みをつくし
あはんとも
つくし
あふ
湯成院
浦くだるねの
岩ぶろ
ふる川
高ぞ
ながりて
あちこちあり
河原左大臣
みちのくに
ものぶ
ちぶり
蘆屋
ゆ
我れ
ゆ
あくま

蓮生

関屋

光孝天皇

君がため春の野に出て若菜つむ
我衣手に雪は降つゝ

中納言行平

立わかれ因幡の山の峰に生る
まつとしきけばいまかへりこん

繪合

松風

在原業平朝臣

千早振神代も聞かず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

藤原敏行朝臣

住の江の岸に寄る波
夢の通ひ路人目よくらん

薄雲
朝顔
伊勢
元良親王

乙女
玉葛
素性法師
文屋康秀

初音

ひられて
ぬる人す
ちりぬる
きく
せよ

胡蝶

蛍

常夏

大江の里

月を待ば
ふる
ものゝ
哀れ
我身
秋のあらし

菅家

山
ぬさも
手向山
紅葉
神まつり

三條右大臣

春の
夏
人
くるるも

貞信公

紅葉
山
一
人

釣舟
野分
中納言兼輔
泉川
深草少将
山里の雪

御幸
蘭
尼河内侍
壬生忠岑

槙柱

梅枝

藤裏葉

若菜上

柏木

横笛

鈴虫

夕霧

若菜 下

横笛

柏木

鈴虫

紀貫之

人をいざ
こころも
しらず
ふるさと
は
はな
ぞむかしの
かをにほひける

清原深養父

なつの
よは
まだよひなれど
あけぬるを
くものいづこに
つきやどるらん

文屋朝康

白露は
ものを
おもふと
なけれども
あきの
ものとて
つらぬきとめぬ

右近

ちらでとも
ながめ
ては
ちりぬべし
人の命も
かくこそあらま
しかば

多賀
あらたまの
年のはじめに
ゆめぞみる
あまいなかの
くもも
あれたちまち
侍従
そのかみの
ことのはぐさを
たのまれて
うたわしとものを
中の
ちぎりかな
参議等
あらたまの
年のはじめに
しのぶまで
なのりてあるぞ
人のたしなみ
平業盛
君ぞまで
いろふ出ふたり
見ぬまひ
ものやあり
人のうみまぬぞ
幼
あわぢ紙
かくふまぬ
夢ふ
ぞる
ほうこんの
ゆめ
紙
まつら
せよ
白官
あるかりの
きれ
いろふ
ものも
ちぎりぬ
ほうぐ
壬生忠見
恋
まそふ
まぶ
人
ゆ
結原元輝
ちぎり
ぬ
ぬ
ぬ

紅梅

竹川

橋姫

推本

紙角
早蕨
源重之
八重むぐら茂れる
人とてもとふ孫
秋来あけり

霜水
東風
大中臣能宣朝臣
みかきもり
薩摩義孝

浮舟
蜻蛉
藤原実方朝臣
藤原道信朝臣

手習
橋姫
儀同三司母
高階貴子
古大納言母

如意今川

今川おほぢの
まうしの紙
いまもむる制
紙書象
る
一常乃あり病
さうかまり
女れもの明る
らざる事

大納言公任

滝乃音はあへて
久べしく成
ぬまでど
名をとめおぢ行く
行きまうえられ

和泉式部

あらざらんこの世の
ものの
今一度逢
ものふるも
がな

一若き女房の
の寺へ参り
まむ事
一少紀貫とて改
めて放れて
恋りて人を
恨る事
一大事をも無

紫式部

発りあひて
そもそもみし
ひとねまうり
会かれ
病まのつき
ぬ

大式三位

有るひ
さ糸風ふ
いく世よ人を
ひとまやら

うちうみ人
よろこぶる
一父母の源き恩
を忘れ孝
乃踊りなる
事
一夫を怖ら
我をうらく

毒深歩
けちふ
いぐりて
まて
の祢なま
ぶを
ぶを
ぶを
ぶを

小式部内侍
大江山
いくの
ちぬ
ぬれば
まぐふ
ぬまの
ぬまの

道を忘れ
さる事
一乃り賢
業ゆる者を
恵み祝ふ
一山を
衰る人を
かろもる

伊勢大輔
いにしへの
ならの
九重
白ひぬ
ぬれ

清少納言
我と
実を
ゆる
けど

事

一拾びの事

或い雅を

集めつるひい

見物をする

好む事

一絵をかて嫌

姫のこころ深く

人を嘲を能ぐ

事

一女の張をこんか

嫌ひ業事

人をそる事

一人乃中ニ式

全人の様を

て月を知む

相撲

こんみ引ひ

紙ぐ

名ふちあん

名をして名れ

前大僧正行尊

もろ中ものの

ものを

花ようしつる

古歌人を

一衣類所具の
のまぶたの墨絵
ゆくゝ古住び
見苦敷事
一貴もしやゝ
法あるべき無人
とゝ法を好
事

周防内侍

春の夜の夢ばかり
たゞうたかの
かひなくあるん
あるとて世をうらむ

二條院

ゆくゝ
うゝ世を
なげくべは
あるべき
春の月の

一人の雅楽あげ
我が智ありと
思ふ事
一出家ゆつ
面もとゝの
側迫くあるゝ
一我が浪紙和
ぢ或はぢ

能因法師

なにはの
むかしの
立田川の
月なりけり

良遷法師

さゞ波の
やど我さ
なぶるまで
しでもあり
秋の夕ぐれ

或いわ[illegible]の事

一下人の言葉を

[illegible]へまど石仕

[illegible]ぶ

[illegible]事

一男の姿をまね

[illegible]て人のそら

をうらやむ事

大納言伊[illegible]

[illegible]ざ[illegible]

[illegible]

[illegible]

一乃紙ちるを金きぶひ我が色はらふ春雪もちる事

一人寄り附我が機嫌おもせいろ式様の事

藤原奉優

紫りとまて

させりぶ霧

いのちみく

あるまとまと

れもいぬ

法性寺入道前関白太政大臣

和田義盛

ぬくられば

くるみの

雲井よまぶ

おもの

ちぶ

右氏傳こ生ふ

ふるこ

事物ふぶと

いども

性むべ

先家をちふ

ぶまのハ

走ふて毎年

我をまぶ走

紫徳院

波をもみい

せちふく

北川の

なもんとぶ

源兼昌

あまぶ

ちどりの

ちぶ

ぶ

波ものせ

乃ちふかぶかとふべ
夫天地陽の
て陰く男の左
あり地の陰の
て和る女の道
あり陰の陽の
隨て事天地
自然の理
なり夫天地

左京大夫歌舞
秋風の音
雲乃あへま
ゆきいづる
月れうげ
待賢門院堀川
なつかしの
まちぶとに
ゆみ乃
ゆきい
もとゆ

乃ち天地
者とへられ
をそのごく
ひたつとぶ是
ときかいち天地
ち道ありされば
いと者あり
ちろもべやき

道園法師
おもひ
命をなるの
うきうき
なみ
ゆ

坂上大寺麻呂
おもくきく
ちろつる
あるもを
はの

世の中よみちの
こゝろをもつて
ありひいれ山の
おくみを分くるな

[illegible]
この古法や
思ひ出
うとみ世
今ちこひ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

家を乱さぬ女い
うこそ
なるこそ好もし
しべの夕我と
ん
熱をさり
稲
の

辞蓮法師

むかしの
きしひぬ
雪
のぐる 秋の夕くれ

雑別離

わ
恋
稲の一穂
へき しゆく

武子門親王

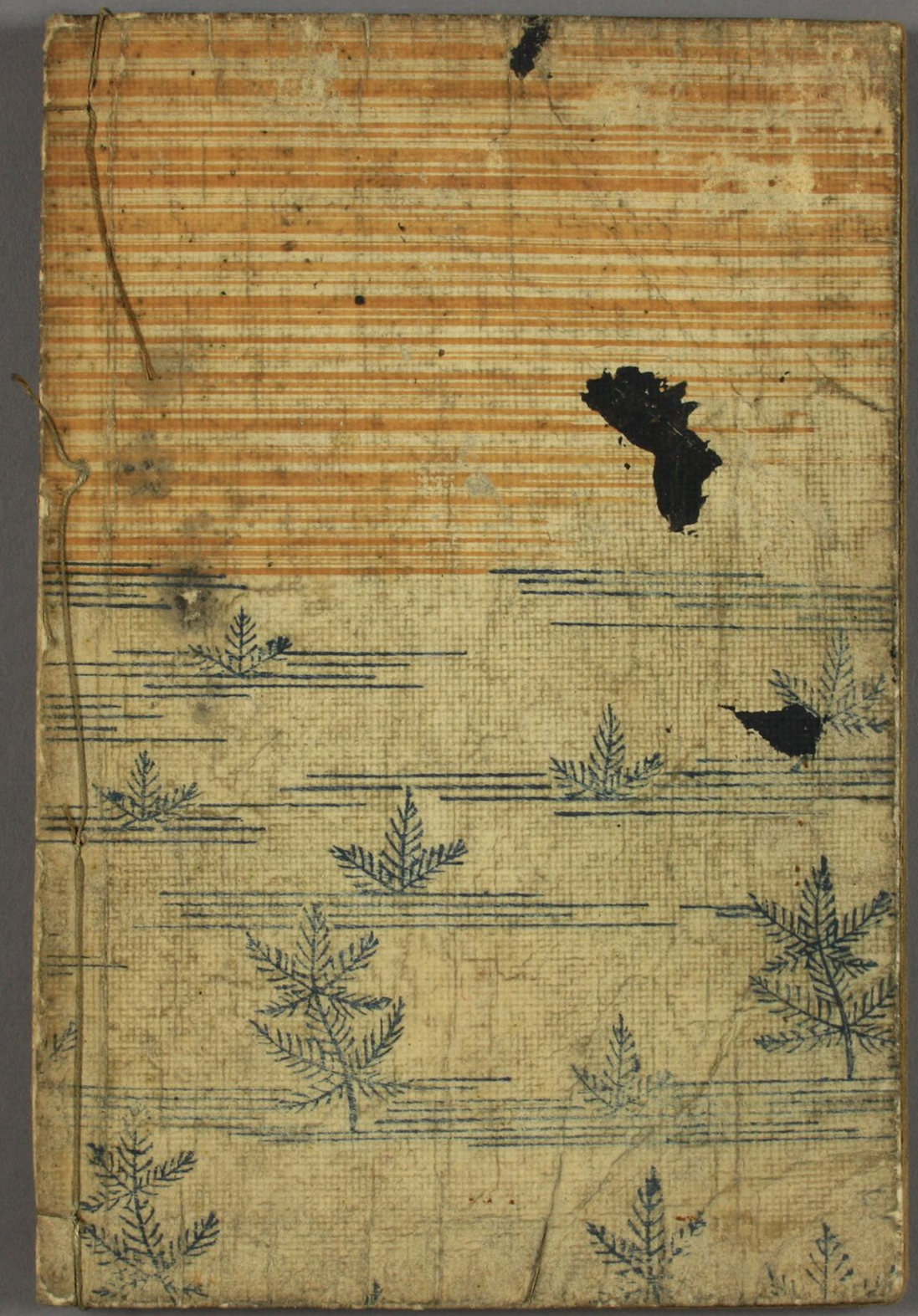
玉
なぶるこの
しるこ
のぞきこ

殿
月院左衛
ぬれ
ぬ

家ふ形まふ
ひ曽姑ふ仕ふ
ゆるるこバ父母
の洋ふ
ばくし
バ考ふ武
一宇
面ふ白
ざり義形

前大僧正義圓
入道前太政大臣
橋本納言宣家
西三位家隆

明治廿一年十二月十五日印刷
仝　年十二月廿八日出版

發行者　開成文堂　吉澤富太郎
東京府本所區松井町三丁目十番地

印刷兼印刷者　坂尾繁太郎
仝　淺草區十軒町六番地